

推測

～今はない古墳群～



太田市立太田中学校
3年 十河愛寧

1. きっかけ

昨年の東国文化自由研究で国宝の武人埴輪のことを調べた。その研究の中で古墳が家の周りにあったという事実がわかった。

「古墳は、どこにどんな風にあったのか?」「どんな村だったのか?」

そう思ったが、今は住宅がたくさん建っていて跡形もなく情報も少ない。そこで、古墳があった具体的な場所や時代を少ない情報から推測してみたいと思った。

2. 疑問

*古墳の周りにはどんな村が広がっていたのか

*古墳はどこにどんな風にあったのか

*いつ/なぜ古墳が造られたのか

3. 調査

今回調べる古墳は「飯塚古墳群」である。太田市の飯塚町にあったということは分かっている。

まず、古い地図からヒントを探したいと思った。昨年近所の方に「上毛古墳総覧」「群馬県遺跡地図」を見せていただいたことを思い出した。見返してみた。

上毛古墳総覧の付属地図(図1)には、古墳があったところに赤丸がついている。古墳群があったとされる飯塚町は九合地区だが、「九合」の所には20個程の丸がついている。しかし、大雑把すぎて具体的な場所が分からない。群馬県遺跡地図(図2)にはより細かい地図で古墳の場所が示されている。そしてこの地図には特徴的なカーブの道のところに「飯塚古墳群」の記載がある。古墳を示す丸の数は5個ある。

もっと古い地図を見てみたいと思ったから、太田市役所 文化財課を訪ねた。文化財課の遠坂さんが「ここにある一番古い地図はこれです。」と第一軍管地方迅速測図(図3)を見せてくれた。この地図は明治13年~17年(1880年~1884年)に測図されたものである。それを見ると、このカーブした道のところに「雑木林」の地図記号がある。

また、インターネットで「歴史的農業閲覧システム(図4)」というサイトを見つけた。このサイトでは明治初期から中期にかけて関東地方を対象に作成された「迅速測図」と、現在の道路、鉄道、土地利用図とを比較することにより、農村を取り巻く環境の歴史的な変化が閲覧することができる。この地図にもあの特徴的なカーブの道がある。このカーブの南側は緑色になっている。木の種類が書いてあるのだが、字の形から「檜(檜ナラ)だ」と考えた。檜の木に実るドングリは縄文時代に主食として食べられていた。檜は広葉樹で、古くから日本で使用されてきた木材だ。今は家具や床材など幅広い用途に使われている。現在ほとんどの古墳には木や草が生い茂っているが、できた当時は石室に土が盛られその周りに石が葺かれていたため人工の山のような山だった。だから、この檜の木は誰かが植えたのか、鳥が種を運んだのかかもしれないのではないかと考えた。「雑木林」にはコナラがよく使われるそうだから、この場所が明治時代は雑木林であったことは間違いなさそうだ。

図1

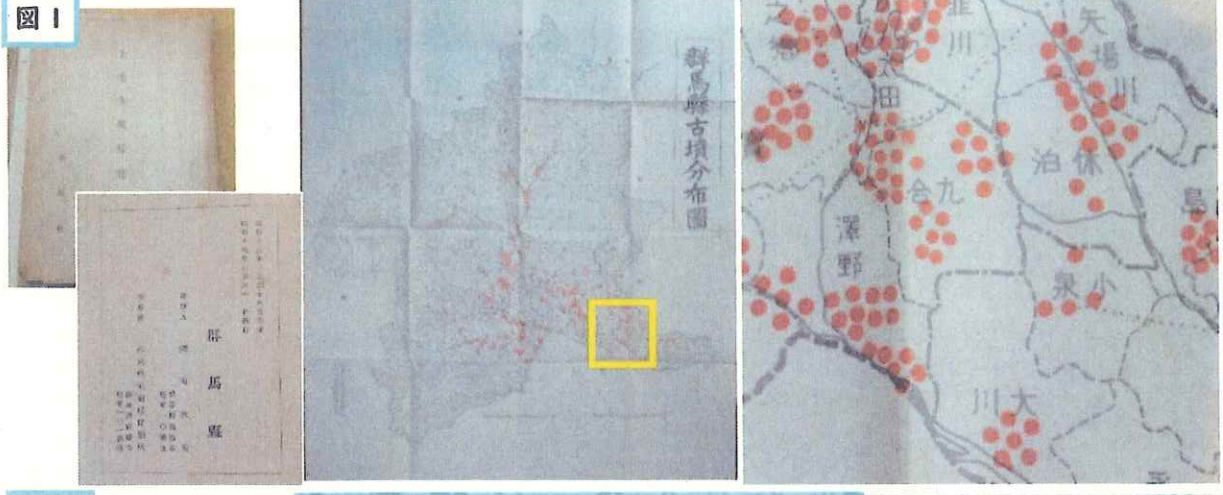


図2



図2・図3・図4に北から南にまっすぐ来て突然東に不自然にカーブする同じ道がかかっている（青い矢印）。図4は図3を参考にしてているから周りの表示も同じようになっている。

図3



図4





図 2



図 2-2



図 4



図 4-2



図 5 花鳥風月おた

浸水深ランクの目安

水防法「改正後(平成29年6月)」の浸水深ランクの目安をお知らせします。ただし、建物や土地の状況により浸水による被害は異なります。

家屋イメージ	浸水深と目安
20m	5~7階が浸水する程度
10m	3階の全てが浸水する程度
5m	2階の全てが浸水する程度
3m	1階の全てが浸水する程度
0.5m	大人の膝まで浸水する程度

※地図上で着色のない区域でも河川や水路の近くなどにお住いの方は、日中より浸水があった場合を想定し、自ら対応や備えをしておきましょう。



【図 2-2】 図 2 の古い地図と同じように赤い丸を現在の地図に貼り付けてみた。

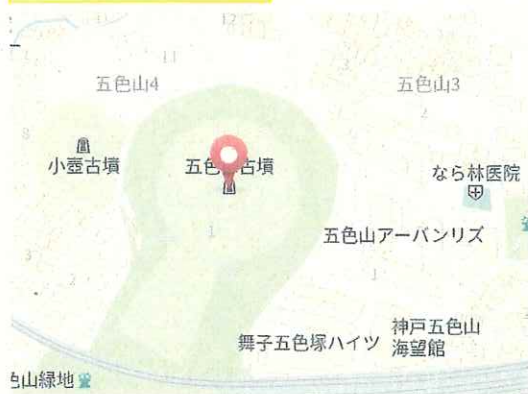
【図 4-4】 このサイトの比較地図を使って現在の地図を表示し、古い地図のだいたいの線をなぞり現在の地図に貼り付けてみた。

【図 5】 太田市の防災マップである。

集めた地図を現在の地図と比較してみると、図2では古墳のおおよその位置が分かってくる。カーブの道の南側に集まっている感じだ。図4で道を示している太いところ(=)が現在の地図の道とほぼ重なった。道路整備がされて真っすぐになっていてもおかしくはないが、丸くカーブの道はほとんどそのまま残っている。図5のハザードマップでは土地が高いところ分かる。あのカーブした道に沿って色が白い、つまり、土地が高くなっている。土地が高いということは古墳があったといえる1つの理由になると考えた。どうやらこのカーブの道の場所にあったことは間違いのないみたいだ。

なぜこんな変にカーブしているのか。当時は車などがなかったため道が真っすぐである必要はあまりないのだ。そうすると「その場所に何かがあってそれをよけるために道をカーブさせたのではないか。」そして「その何かは古墳ではないか。」と考えた。全国の古墳の地図を見てみると、古墳の周りにはくねっと曲がったり古墳に沿ったりした道があることがわかる。

五色塚古墳 (兵庫県)



井出二子山古墳 (群馬県)



このカーブの道のそばにどのくらいの大きさの古墳があったのか。

これを推測するにあたって、昨年、近所の方に取材したときに言っていた「ここには円墳があった。」ということ。そして、先ほどの図2の赤い丸の数(5つ)を仮定して推測していく。

日本で最大の円墳は、奈良市にある富雄丸山古墳で、その直径は110mである。日本で最小の古墳と言われているのは群馬県北群馬郡榛東村にある穴薬師古墳という円墳である。墓地の一角に残る古墳で、その墳丘の大きさは直径2~3mである。遺跡地図などを見ても飯塚古墳群の名前は載っていないことも多いから、そこまで大きくなかったのではないかと思う。



国土地理院の「自分で作る色別標高図」の機能を使い、この赤い丸がある周辺の標高の差をより細かく表示してみた(図6)。すると真ん中に縦に通る広い道よりも西側に高い部分(赤色)があった。東側は黄緑色・黄色の中にオレンジの部分とところどころある。あくまでも今の標高であるが図6の地図と図2の赤い丸の場所を参考にして大体の古墳の大きさを示してみた(図6-2)。

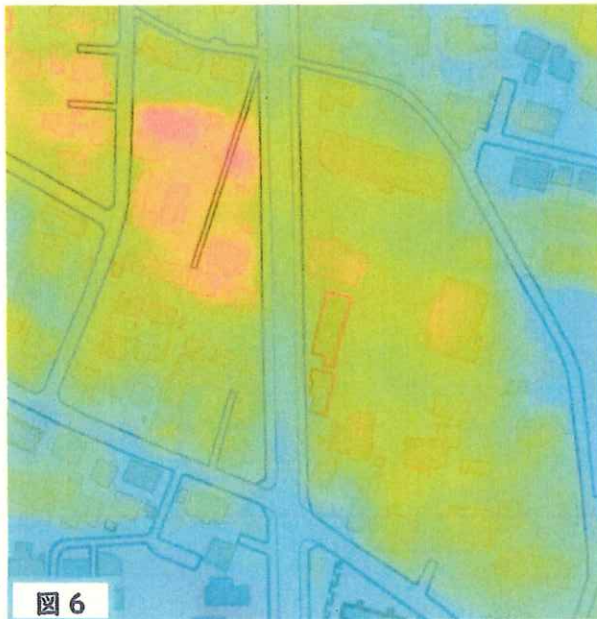


図 6

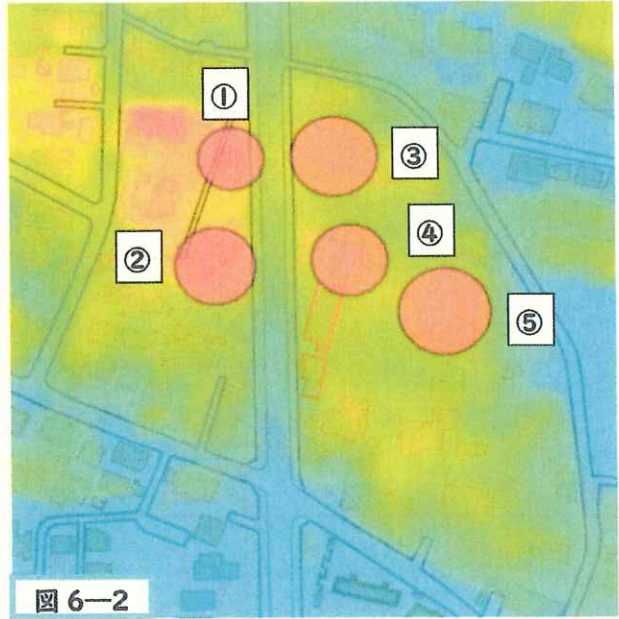
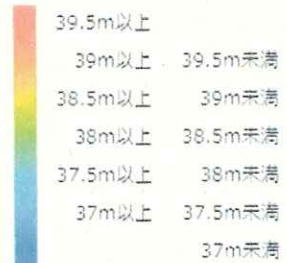


図 6-2

大きくても直径 35m くらいかなという感じだ。ひとつ気になることは、①の丸の西側にも標高が高い赤色の部分があることだ。しかし、このカーブの道の周りは青くなっていることから、このあたりだけ土地が高くなっているのは一目瞭然だろう。今地図を見てもわかるように建物もたくさん建っているから土地を均してしまったり、風雨に影響を受けたりして、土地が低くなった・平らになったところもあるだろう。大きさを正確に知るのには難しいが、標高の差で見たら直径 25m～35m の大きさの古墳が集まっていたと言える。

それぞれの丸の直径

- ① 25.4m
- ② 30.8m
- ③ 32.6m
- ④ 28.8m
- ⑤ 35.6m



なぜここに古墳を作ったのか。それは「周りに水田・田があるからだ」と考えた。田んぼは周囲よりも土地を低くしたり、水路の溝を作ったりしなければならぬ。そのためには「土を掘る作業」が必要である。その掘った土を古墳を作るために使ったのではないか。図 4 の地図でもっと周りを見ても水田を示す黄色が多いことが分かる。「古墳を作るために田んぼを作った」というよりは「田んぼを作るために土が余っていたから古墳をこの場所に作れた」というのかなと思う。



図 4 (拡大版)

そして、いつ作られたのか。「巨大古墳の歩き方」によると古墳時代は約 400 年続いたが、時代の経過とともに社会が変容しそれに合わせて古墳を取り巻く環境も変わっていった。そして、古墳の形態によって、古墳時代は前期・中期・後期と、3つの時代に分けることができるそうだ。「太田市の古墳」によると、

古墳時代前期 (3世紀後半～4世紀後半)	古墳時代中期 (4世紀末～5世紀後半)	古墳時代後期 (5世紀末～7世紀末)
利根川を上り石田川流域の地に根をおろした人々が、広大で肥沃な市域の平野を開拓し始めた時期であるといわれている。この時期の市域の古墳は、こうした開拓者たちのリーダーの古墳であると考えられる。	巨大前方後円墳が作られるようになる。首長の勢力が増大していった時期であるといえる。当時の太田市域は畿内大和政権の「毛野国」と呼ばれた地域にあり、こうした巨大前方後円墳は、畿内大和政権との深いつながりをもった毛野国の大首長あるいはそれに関連のある人の墓であるとされている。	太田市域では巨大前方後円墳は造られなくなり、中小地方豪族が小形の前方後円墳を造るようになった。また、村の有力者層たちの他、支配者層でない者までもが、直径10～20mの小型の円墳を、市域の台地あるいは山間部といったごく限られた範囲に密集して造るようになる(群集古墳)。

と書かれている(一部書き換え)。こうして見てみると小さい円墳が狭い範囲の中に造られた飯塚古墳群は、古墳時代後期に造られた説が有力であるといえるだろう。

被葬者は誰だったのか。被葬者のヒントは古墳の内部、棺の中や外に備えられた副葬品にあるがそれがない。しかし、この古墳群には国宝である武人埴輪が配置されていたと考えられる。この埴輪は完全武装の東国武人の姿を現している。太田市周辺では、同じような特色を持つ優れた武人埴輪が数体出土している。後期古墳時代に入ると大王や豪族だけでなく、小単位の首長や有力な農民も被葬者の対象となった。規模もそこまで大きくないことから有力な農民の可能性も高いだろう。

コラム ～地名にもヒントが～

飯塚という地名には「塚」が使われている。「塚」という字がつく古墳は全国にたくさんある。

「塚」とは

①土を高く盛って築いた墓。 ②しるしとして、土などを小高く盛り上げた所。

という意味で、「塚」という漢字自体にも「土を高く盛った墓」という意味を持っている。明治時代にかかれた図3・4にすでに「飯塚村」という表記があることからそれよりも前につけられた地名である。地名がつけられた時に古墳がなくとも、古墳があったことを表す、少し土地が高くなっている墓があった。そこから「塚」という漢字が使われたのではないかと思う。

まとめ

*明治時代、群馬県遺跡地図にかかれている古墳の位置の場所は檜の木「雑木林」であった。その周りには田んぼが広がっていた。

*全国には古墳をよけるようにしてつくられた道がある。古墳をよけるために変にカーブした道が作られた。

*カーブした道に沿って古墳があったとされる場所は土地が高くなっている。

*現在の標高の差で考えると、5つある古墳の直径は25m~35m。

*周りに田んぼが広がっていたため、土がたくさんあった。そのため、古墳を作りやすい場所だった。

*大きい古墳が作られなくなり小型の円墳がたくさん作られるようになった、古墳時代後期に作られた。

*被葬者は特定することが難しいが有力な農民だった可能性が高い。

感想

今回は昨年の研究の発展のテーマを設定した。「まとめ」もあくまで自分の推測である。しかし、今ある資料を駆使して推測ができたと思う。

昨年この古墳群の存在を知りとても驚いた記憶がある。そして何より国宝の埴輪が出土している事に衝撃を受けた。自分の住んでいる地域の誇り・自慢になった。しかし、近所の方でその事実を知っているのはお年寄りだけだ。古墳時代というと「古墳があって、埴輪があったんでしょ。」というだけで、興味関心を持つ人が少ない。確かに戦国時代などに比べたら地味な時代かもしれない。しかし、古墳・埴輪の魅力は計り知れない。この魅力を知るきっかけをつかむ人が少ないために、古墳のことを好きで、詳しく知る人は少ないのだと思う。特に小中学生には少ないと感じる。

しかし、最近古墳のグッズが販売されるほど古墳に興味を持つ人が増えている。今残っている古墳は全国にたくさんある。しかし、今は残っていない古墳もたくさんあるのだ。その古墳を調べた今回は、地図やいろいろな資料をたくさん見て推測してみた。「なぜここに作られたのか」「どういう風に作られたのか」など疑問から自分なりに推測してみるのも1つ古墳の楽しみ方だと思った。そして、今現存している古墳だけではなく昔あったとされる古墳の存在もあるということをもっと多くの人に知ってほしい。

色々な埴輪について知ることができた一昨年の研究。「なぜ、私の家の土地は周りより高くなっているのか。」そんな疑問から始まった昨年の研究。そして、その古墳を推測してみた今年の研究。私は今、3年間この東国文化自由研究を通して知ったことを伝えていかなければならないという使命感に駆られている。これから、もっと色々な人の話を聞き古墳を見て回り資料に目を通して、古墳にもっと詳しくなりたい。そして、色々な人に魅力を伝えていきたい。

参考文献

〈サイト〉

- ・歴史的農業環境閲覧システム <https://habs.rad.naro.go.jp>
- ・国土地理院 <https://www.gsi.go.jp>
- ・古墳マップ <https://kofun.info/>
- ・道のあれこれサイト「国道の歴史」 www.dc.ogb.go.jp/road/michiarekore/michi_map.html

〈書籍〉

- ・古代史散策ガイド 巨大古墳の歩き方 監修：大塚初重

〈資料〉

- ・上毛古墳総覧
- ・群馬県遺跡地図
- ・第一軍管地方迅速測図
- ・太田市の古墳